

入山學道



入山學道

にゆう せん がく どう

無明闇痴の雲はれて

本覺眞如の空清き

舍那圓滿の月の顔

見まくほしさに戀すなれ

一度び肉の我となりし

罪の衣を被し身には

慕したふ心こころは深ふかけれど

是これだに稱かなはぬ世よなりせば

狭せまき心こころにあらなくも

堅かたき心こころの一筋ひとすじは

金剛こんごう不壊ふえの意思いしをもて

娑婆こども即常寂土じょうじやくど

妙たえなる姿すがた妙たえにして

逢坂おうさかの關せき越え難がたく

活いき存ながらふべき甲斐かやある

深ふかき思おもひに沈しずみける

巖いわおも徹とおすと聞きくからは

恩愛おんあい繫縛けいばくの網つなを斷たち

舍那しゃな清淨じよじよの法のりの身みは

現げん在ざい説法せつぽうと聞ききつれど

肉にくの心こころにつゝまれし

此し土どと彼ひ土どとは一重ひとえなる

されど濁にごりの世よになべて

しづけき山やまに入いりてこそ

無明むみょうの雲くもに覆おおはるゝ

無明むみょうの雲くもぞ隔へだつなれ

塵ちりの巷ちまたを立たちいでゝ

靈きよき國くには開ひらき見みむ

禮 拜



禮 拜 (即ち歸命救ひを求むるため己をさへ捨てて拜禮す)

大慈なる吾如來よ

聖旨にそむきて我々は

始なき無明にさまよひて

罪にほろびし身なれども

みおやの愛いとふかく

迷子をことに愍みし

召喚まねきの聖聲みこえに驚おどろきて

悔くあらためて恩寵みめぐみに

身みをも意こころも歸命きざむなり

すべてを聖旨みむねに任まかすなり

心こころを致いたし身みをつくし

いまは心こころも覺さめにける

至心ひとえに歸依きえしたてまつる

救すくひの聖手みてを垂たれたまへ

大慈懷おおみふところに攝おさめませ

聖前みまえに禮拜ぬかずき奉たてまつる

讚さん

歎だん

(聖きよき光ひかりを讚賞さんじやうして聖旨みむねに相應そうおうせんことをいのる)

アー、讚ほむべき如來みほとけの

げに不可思議ふかしぎのみ光ひかりは

あらゆる佛ぶつ陀だもまかさつもみな悉ことごとく稱たたへしと

ア、聖せいなるみひかりよ我われらが罪つみをかき消けして

聖きよきみむねに稱かなはせよ正義ただしきみむねに相あ應わせかし

清きよき光ひかりはいさぎよく歡喜かんぎの光ひかりは安やすらかに

智ち慧えの光ひかりに聖さとくはし斷たえぬ光ひかりはいとも靈よく

我われ等らが染汚けがれを洗そぎては聖きよき心こころになされかし

げにく讚ほむべきみ光ひかりの如來によらいを稱たたへ奉たてまつる

回え向こう (恩寵めぐみによりて更こう生せいし聖旨みむねの體現たいげんをいのる)

至眞しいしんしいせんしいび至善せいぜん至美せいびなる

聖旨みむねによりて更生よみがえり

さゝげまつりしこの身みもて

恩寵めぐみを我われにみたしめよ

神聖しんせい眞理しんりのみひかりに

正義せいぎのみむねを體たいしては

われに菩提ぼだいを得えせしめよ

すべてのひと、諸共もろともに

聖きよきみくには開ひらけにき

聖子みこの員かずなる我々われわれは

みむねにつかへまつるなり

我同胞わがはらからにわかちてむ

聖きよき靈こころとなせよかし

世よつぎのつとめを果はたさなむ

ひとり己おのれが爲ためならじ

安寧やすきみくに聖國せいこくににいたるなり

佛々相念の讃

ほんぬー じょうじゅう ほっしんー の
むーりょう こうおう だいにちーりん
いじんの こうみょう とこしえに
じっぽう せかいを てらしては
くらきに まーよう・こらがたーめ
ほうべん ふしぎーの ちかーらよーり
しゃかむに ぶつーと あらわれーて
みおやの じーひをしめします

佛ぶつ々ぶつ相そう念ねんのの讚さん

本有常住法身のほんぬじようじゆうほつしん

威神いじんの光明こうみようとこ永とこしへに

無明くらきに迷まよふ子こらが爲ため

釋迦牟尼佛しゃかむにぶつと現あらわれて

譬たとへば西にしに日ひは入いるも

無量壽王むりようじゆおうの日光にっこうは

無量むりよう光こう王大日輪おうだいにちりん

十方じつぽう世界せかいを照てらしては

方便ほうべん不思議ふしぎの力ちからより

如來みおやの慈悲じひを示しめします

光ひかりは月つきに映うつる如ごと

牟尼むにまんげつ滿月まんげつに輝かがやけり

釋尊 出世の本懷しやくそんしゆつせ ほんがいを

すなわ せそん じやくじよう

即ち世尊は寂靜に

ほんぶつみ だ れいこう

本佛彌陀の靈光は

そのときしよこんえつよう

爾時諸根悅豫し

たか みかお ぎ ぎ

光き顔は巍々として

かげ ひようり とお ごと

影が表裏に暢る如と

靈鷲の嘉會りようじゆ かえ しめに示さんと

み ださんまい いり

彌陀三昧に入たまふ

にんぶつむ に うつ

人佛牟尼に映ろひて

ししき こと きよ

姿色も殊に清らけし

たと みようじよう かがみ

譬へば明淨なる鏡

いよう ひかりきわ

威容の光極みなし

同 二

如來によらい清淨しようじよう光明こうみようは

諸根しよこんは最いとも清きよらけく

如來によらい歡喜かんぎの光明こうみようは

諸佛しよぶつの常つねに住すみませる

如來によらい智慧ちえの光明こうみようは

世間せけんの闇やみを照てらしては

如來によらい不斷ふだんの光明こうみようは

世尊せそんの感覺みむねに映うつろへば

奇特きどくなること極きわみなし

世雄せおうの聖情みむねに融ゆう合ごうし

大我たいがの中なかに安住あんじゆうす

世眼せげんの智慧ちえと現あらはれて

如實によじつに衆生しゆじようを導みちびきぬ

世英せようの聖意みむねに實現じつげんし

至高徳しいこうとくに在ましまして

によらいまんとかそなわ

如來萬徳具備りて

さんりんまどか

かがみ

三輪完全の鑑とし

にんぶつむに

ひたすら

人佛牟尼は一向に

ほんぶつみだ

れいとく

本佛彌陀の靈徳は

にゆうががにゆう

しんぴ

入我我入は神秘にて

じんじんふし

きぎ かんろう

甚深不思議の感應は

最勝道さいしようどうに住じゆうしける

てんそん

み げん

天尊の身に現じては

しゆじよう

のり

た

たま

衆生に軌を垂れ給ふ

ほんぶつみだ

おくねん

本佛彌陀を憶念し

むに

しんい けんげん

牟尼の身意に顯現す

さんみつまさ

みようごう

三密正に冥合し

こ

このきよう ひおう

是れ斯教の秘奥なり

願ねがはくは我われ同胞はらからと

念佛ねんぶつ三昧さんまいを宗むねとして

靈りよう鷲じゆの月つき

(佛々相念の讚の譜に同じ一一七頁)

世尊せそんの範のりに隨順ずいじゆんし

光ひかりの中なかに生活くからさなん

滅後めつごに我われを戀こいしたひ

衆生しゆじよう既すでに信伏しんぷくし

一心ひとえ佛にを見みまほしく

時ときに我われは衆僧しゆそうらと

渴仰かつかうの心こころ生しやうじなん

質直すなおに意柔こころやわら軟けく

自みずから身命しんめいおしまねば

俱ともに靈鷲りようじゆの山やまに出いで

すなわ かく 即ち斯 かた は語るなり

ただほうべん ちから

唯方便の力にて

よこく あ 餘國に在りて人々が ひとびと

われ かれ 我また彼らの中にして なか

なんじ これ 汝ら此を聞 きか ずして

われ すべ 我は衆ての衆生が ひとびと

ため このみ 爲に此身を現 あら はさで

ひとえ こ 一心に戀ひて慕 した ふれば

つね めつ 常に滅せず此 ここ に在り あ

めつ ふめつ 滅と不滅と現 げん ずなれ

くきようしんぎよう もの 恭敬信樂する者は

むじよう のり 無上の法を説 とき ぬべし

ただわれめつど た 但我滅度すとおもふ

くかい もつぎい 苦海に没在する故 から に

かつこうしん しよう 渴仰心を生 し ぜしむ

すな いで 乃はち出て法 のり を説 と く

一心十界の頌

あめつちよ—ろずの—もの—はみなほつ
 しんによ—ら—いぞう—しょうのは
 つげん—な—り—としるとききはひ
 とのここ—ろ—のねぞ—ふかし

一心十界の頌

いっしんじつかい

うた

精神大

あめつち
 天地よろづの物ものはみな

ほつしんによらいぞうしょう
 法身如來藏性の

はつげん
 發現なりと識しるときは

ひと
 人の心性根底ねぞ深ふかし

十一界心

たとへば巧たくみな畫えがき師しが

さまざますがたの姿うつを繪えすごと

ろくほんししやう

六凡四聖とかはれども

ならく

さか

かか

地獄

地獄は倒に懸りてぞ

みち

さから

り

もと

人道に逆ひ理に戻り

うざいむざい

がき

餓鬼

有財無財の餓鬼てふは

たからと

ごよく

むきは

たからと五慾を貪りて

かたち

ひと

に

畜生

形は人類に似たれども

すぐ

みち

よこ

正なる人道を横さまに

ひと

ところ

つく

一つ心や造るなれ

ほのお

たけき炎にやかるゝは

ざんこくひどう

むく

残酷非道の報ひとや

にくよくがよく

やまい

肉慾我慾の弊悪症にて

おも

つみとがつく

重き罪惡造るなり

ところ

とり

けもの

情操は禽かは獸かは

あゆむゆくえ

歩行衛はいづくぞや

修羅

おのれ慢たかぶり他たを威おどし

天てんを畏おそれず世よをなみし

人間

仁義禮智じんぎれいちのみちありて

義務つとめは國家くにの爲ためにとて

天上

博ひろく愛あいして人類ひとの爲ため

世よに幸福こうふくを與あたふるは

聲聞

小聖こひじは四諦したいの理りを觀かんじ

偽善ぎぜん偽德ぎとくに名なを銜てらひ

驕おごる阿修羅あそらの面かおにくし

社交しやこうは互たがいに恕おもひやり

力ちからを竭つくすは人ひとなれや

我われを犠牲ぎせいに獻ささげてぞ

國くにつ神かみかや天人あまびとか

無む我がは宇宙うちゆうを身みと爲なせば

縁覚

神通じんづうおのづと具そなはりて

ひとりひと静しずかに座ざを占しめて

無明むみ生死しようじの夢ゆめさめて

菩薩

ぼさつちかいは誓ちかいの海うみふかく

一切すべて衆生のものを我身わがみとす

佛陀

佛陀ぶつだは三身さんしんまどかにて

智慧ちひやあまねく照てらしては

無為むいの都みやこに栖すみあそぶ

因縁いんねん無生むしようの理りをさとり

縁覺えんかく涅槃ねはんにい入りぬらめ

菩提ぼだいをもと求め衆生ひとを度どし

同體どうたい大悲だいひの極きわみなし

法身ほっしん在いまさぬ所ところもなく

八相はつそう應化おうげのあと高たかし

ねむり 無明は六のやみぢなり

くかい 九界にかゝる雲はれて

ぶつぼう 佛法を外な求めそよ

うちゆういちだいしんが 宇宙一大真我なる

によらい 如來の智光に無明覺て

じそう 事相は内容かぎりなき

かか しんり 斯る眞理を得てよりは

さいしゆうしんり もくてき 最終眞理の目的に

さむ いちによ そらきよ 覺醒れば一如の天清く

ほんがくにょらい ひ あ 本覺如來の日は明けし

おの みなもと 己がこゝろの源の

あみだによらい きみよう 無量光壽に歸命せば

てんしんじししよう あらわ 天真自性は顯るれ

よろず くどく あた 萬の功德は與へらる

たいが なか われ 大我の中の我として

まじわ一つとめ つと 參り天職を力めかし

のりのいと

あ み だ ほ と け - の の り - の い と - こ
 こ ろ の た ま - に つ ら - ぬ き て - み
 な も ろ と も に の ち - の よ は - お
 な じ は ち す - の み と - な ら ば -

のりのいと

(一) あみだほとけの法のいとのり

心こころの玉たまにつらぬきて

みなもろともにのちの世よは

同おなじはちすの身みとならば

(二) この露つゆの身みはこゝかしこ しばしがほどは別わかるとも

心こころはずずの緒おを通とほし

同おなじさとりの身みとならん

(三) のちこの經ふみをよむひとは おもひ出だすらむ花はなの上えに

なかげをちぎりしこの友ともを ふかきまことの友ともとして

(四) 清きよき御法みのりのいとぐちを 心こころにとほせ親おやも子こも

また兄弟きょうだいも友ともだちも

この一ひとすぢの法のりの絲いと

(五) ともに心こころに貫つらぬきて

親おや子こ夫ふう婦ふも兄きょう弟だいも

(六) 一ひとつの法のりの絲いととほし

南な無む阿あ彌み陀だ佛ぶつ なむあみだ

同おなじく無む爲いの身みとならば

六ろく親しん眷けん屬ぞく友ともだちも

同おなじく無む爲いの身みとならむ

南な無む阿あ彌み陀だ佛ぶつ あみだ佛ぶつ

いのちの葉

よわの あらしのはげしきに -
 ふしたる くさも いろかえて -
 ときしも ふける あきかぜの -
 からさでのこす のべもなし -

いのちの葉_は

一三三

(一) 夜半よわの嵐あらしのはげしきに

ふしたるくさ草も色いろかへて

時ときしも吹ふける秋風あきかぜの

枯からさで残のこす野邊のべもなし

(二) あなかなしかる秋風のあきかせ

もみぢも共に吹き落すとも ふ おと

(三) 花も緑の千ぐさをもはな みどり ち

我身もいつか秋風にわがみ あきかせ

(四) 我身千歳とたのみしにわがみ ちとせ

月さへ西にかたむけりつき にし

草のみどりも紅のくさ くれない

落てはへだつる色もなしおち いろ

散ぬ枯ぬと聞くからはちり かれ き

ちりぬるものぞ命の葉いのち は

いつまでこゝに有明のありあけ

たれもかたむけ彼國にかのくに

こゝろの眼まなこ

(念佛三昧の譜に同じ七九頁)

慧眼 十方じつぽうに圓まどかに照りてさはるべき

もの一いつもなきは慧眼えげんなりけり

きく耳みみもきかるゝ聲こえもなかりけり

さやかに智慧ちえのこゝろのみにて

法眼 靈界れいかいのきよき五いつつの色いろも香かも

見ゆるは法の眼のり まなこなりけり

法の眼のりめの開ひらけしからは靈界れいかいの

妙色莊嚴みようしきしやうこん頭あはれぞする

佛眼ぶつげんみほとけの常寂光じやうじやつこうの莊嚴しやうこんは

佛眼ぶつげんをもて見みゆるなりけり

一切いっさいの萬物ばんぶつの中なかに説とく法のりは

佛ほとけの耳みみぞ聞きくべかりけり

忍しのぶのこゝろ

(念佛三昧の譜に同じ七九頁)

けはしくも忍しのぶの山路やまじこ越へぬればいと安やすらけき道みちに出いづらめ

わだつみもくみつくすとのいさましき

心こころに得えたるまにの玉たまかな手ても足あしも断たれてもなほ安やすらかに忍しのびしみあとならはんものよ火ひにやかれ鎚つちにうたれてくるがねも世よにめづらるゝつるぎとはなれ

ふしぐもまた骨々も解かれても

安く忍びてひじりとはなれ

みちのくの忍ぶの山路さかしくも

なるればやすくのぼり越ゆるん

すゑつひにかちどきあぐるものゝふは

忍ぶの鎧きればなりけり

真心に此處もかしこもなかりけり

十方世界只一つにて

みほとけを念ふ心が目に見へば

さながらたとき佛なるらん

三 禮



十二光佛讚禮

